

## 各学校段階におけるスクールカーストの認識とその要因

— 大学生を対象にした回想法による検討 —

石田 靖彦 (学校教育講座 (心理学))

### A Study on Students' Recollection of "School Caste" and its Reasons.

Yasuhiko ISHIDA (Department of School Education (Psychology),  
Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan)

**要約** 本研究では、大学生117名を対象に小学校から高校までの学級内の人間関係を回想させた上で、グループ間における非公式なステータスの序列として定義される「スクールカースト」が、(1) 各学校段階でどの程度あったか、(2) 序列があった場合は、その序列の内容や理由を自由記述により回答を求めた。同性グループに対する序列化の認識率は、中学校でもっとも高く男子で77%、女子で87%が少しはあったと回答した。小学校でも男子で54%、女子で72%が少しはあったと回答しており、女子では小学校でもグループ間の序列化が行われていることが示された。高校では男子で67%、女子で62%で中学校よりも低下していた。一方、異性グループに対する序列化の認識は、同性グループに対する序列化の認識とは異なるとともに、その理由についても、男女で異なることが示された。以上の結果から、男女においてグループ間の序列が認識として共有されているのかどうか、また実態としてスクールカーストが存在するのかどうかについて議論した。

**Keywords** : スクールカースト, 小学校から高校までの認識率, 序列化の理由

### 問題と目的

近年、中高生の学級内の人間関係を表す言葉として「スクールカースト」が注目されている。

鈴木 (2012) によれば、スクールカーストとは、主に中高生で発生するクラス内の友人グループ間における非公式なステータスの序列のことで、それが教室内の教師や生徒間で共有されることで、生徒の身分の差として維持される現象のことを指すという。

鈴木 (2012) は中学校2年生2874名を対象として、クラスでの人気の高さの自己評定をスクールカーストの指標として用い、スクールカーストと関連する要因についての大規模調査を行った。その結果、スクールカーストの上位者 (人気があると自己評定した生徒) は、自己主張が強いこと、面白くノリが良いこと、容姿が良いこと、恋人がいること、運動部に所属していること、学力が下位より高いことなどの特徴を持っていることを明らかにした。逆にスクールカーストの下位者の特徴は、これらの特徴を持たない生徒で、悪く言えば目立たない生徒であると述べている。

水野・加藤・川田 (2015) は、中学生780名を対象にして、生徒のコミュニケーションスキルがクラスでの人気度や自分の所属するグループの中心度 (クラスの中でどの程度中心的なグループか) に及ぼす影響について検討した。その結果、人気の高さには生徒の表

現力、自己主張力、関係調整力が影響し、グループの中心度には、自己統制力が高く、加えて男子では読解力、関係調整力、他者受容の低さがグループの中心度に影響することを明らかにした。

一方、Rose, Glick, & Smith (2011) は、欧米における児童生徒の人気に関連する要因について概観し、社会的スキル、外見・容姿・身体的魅力、裕福、学力、運動能力、関係性攻撃、力強さ、面白さなどが、人気の高さに関連していることを指摘している。

これらの要因のどれが人気に関連するかは、学校段階や男女によって多少異なることも明らかにされている。しかし、これらの要因はいずれも児童生徒の要因であるために劇的に変化することは少ない。クラスや学校が変わっても人気の高さが比較的安定しているのは、そのためであると考えられる。鈴木 (2012) は、小学校5年時での人気の高さを回想させて、それと中学校2年時でのスクールカーストとの関連についても検討し、学校が代わっても学級内の地位が大きく変動することがないことを報告している。

しかしながら、人気や地位に関する研究とスクールカーストに関するでは、大きく異なる点がある。もっとも大きな違いは、人気や地位が基本的に児童生徒のそれぞれに与えられるものであるのに対し、スクールカーストは、学級内のグループの存在を前提とし、その友人グループ間の序列や階層を問題にしている点で

ある。森（2007）はこのようなグループ間の階層や序列化について、「主に中学・高校で発生する人気のヒエラルキー（階層性）。俗に『1軍、2軍、3軍』『イケメン、フツメン、キモメン（オタク）』『A、B、C』などと呼ばれるグループにクラスが分断され、グループ間の交流が殆ど行われなくなる現象」と述べている。そして、このグループ間の序列や階層が維持されるのは、鈴木（2012）が指摘するように、各グループに対する認識や序列が、教師を含めたクラス全員に共有されているからだと考えられる。

したがって、スクールカーストを検討するには、児童生徒が学級内にどのようなグループが存在していると認識し、そのグループ間にどのような序列や階層があると認識しているかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、小学校から高校までの学級内の人間関係に着目し、それぞれの学校段階で、自分を含めたクラスメイトが学級内のグループ間の序列や階層をどの程度認識していたか、また認識していた場合、どのような観点で序列化を行っていたかという、児童生徒の序列化の視点に着目する。

またグループの特徴やそのグループ間の序列化は、男女で異なると考えられるため、男子グループ間の序列化と女子グループ間の序列化を区別して測定するとともに、同性グループに対する序列化と異性グループに対する序列化も区別して検討する。とくに異性に対する意識が芽生える思春期では、異性グループに対する捉え方は、同性グループとは異なる可能性が考えられるからである。もしも男子グループ間の序列化の視点が、男子と女子で異なるならば、その序列化は少なくとも男子と女子では共有されていないことを示すことになるだろう。本研究ではこの点についても検討する。

## 方法

### 調査対象者

国立A大学の3年生を対象に調査を実施した。分析には、研究目的での使用に同意し、かつ記入漏れなどの回答に不備のない117名（男性52名、女性65名）を用いた。

### 手続き及び調査時期

授業において、スクールカーストに関する講義を行った後、以下の質問紙調査を講義終了後に実施した。調査は匿名で個人が特定されることはないこと、回答したくない場合は回答しなくてもよいことを教示した上で実施した。また研究目的でのデータの承諾の可否についても回答を求め、同意の得られた対象者のみ分析に利用した。調査時期は2015年11月であった。

### 調査内容

スクールカーストについては、鈴木（2012）の定義に従って「クラス内の友人グループ間における非公式

なステイタスの序列のこと」と説明した上で、小学校高学年（5、6年生）、中学校時代、高校時代の学級内の人間関係を回想させた。そして、各学校段階において、下記の2点の回答を求めた。

#### 1) グループ間の非公式な序列の有無

同性グループ間の序列化の認識と、異性グループを序列化の認識を区別して回答を求めた。具体的には、男子の調査対象者には「男子が男子のグループを序列化すること」と「男子が女子のグループを序列化すること」、女子の調査対象者には、「女子が女子のグループを序列化すること」と「女子が男子のグループを序列化すること」という質問を設定し、各学校段階における有無を、「よくあった」「少しあった」「全くなかった」「分からない」の4件法で回答を求めた。

なお、回答は自分が序列化を行っていたかどうかではなく、同性のクラスメイトがそのような序列化を行っていたかどうかを回答させた。

#### 2) グループ間の序列の内容、理由

1)の質問において、「よくあった」「少しあった」と回答した者には、どのような点で序列化が行われていたのか、その内容や理由を具体的に記述させた。その際、複数の理由がある場合は、それらをすべて記述させた。

## 結果

### 1. 各学校段階におけるグループ間の序列化の認識率

Figure 1～4は、男子の男子グループに対する序列化の認識率、男子の女子グループに対する序列化の認識率、女子の女子グループに対する序列化の認識率、女子の男子グループに対する序列化の認識率を、各学校段階に分けて図示したものである。

#### 1) 男子の男子・女子グループに対する序列化の認識

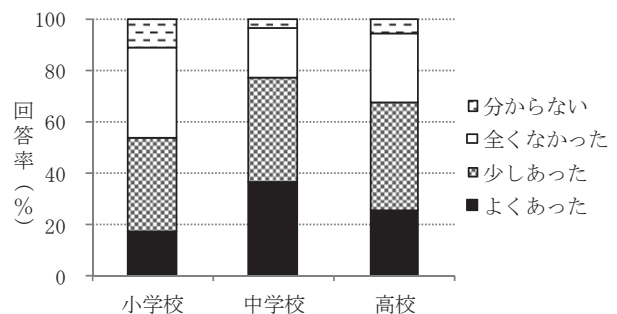


Figure 1 男子の男子グループに対する序列化の認識

同性である男子グループ間の序列化の認識は、中学校時代がもっとも多く、ついで高校時代、小学校時代であった。もっとも低い小学校時代でも「よくあった」「少しあった」を含めると50%以上があったと回答しており、小学校時代からグループ間の序列化があったことが分かる。

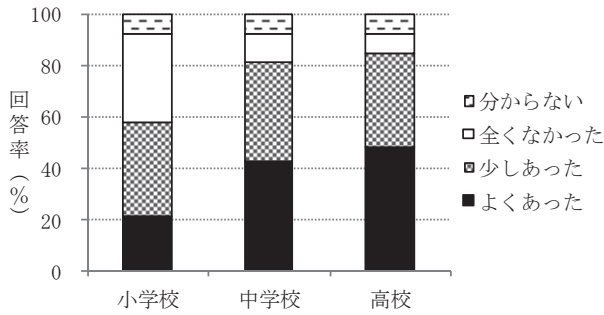


Figure 2 男子の女子グループに対する序列化の認識

一方、異性である女子グループに対する序列化は、高校時代がもっとも高く、ついで中学校時代、小学校時代であった。

男子では、同性グループ間の序列化と異性グループに対する序列化は、そのピークが異なると言える。

2) 女子の女子・男子グループに対する序列化の認識

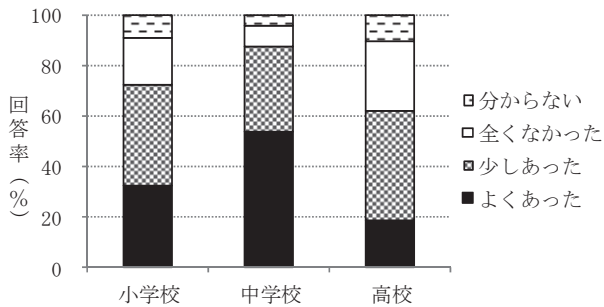


Figure 3 女子の女子グループに対する序列化の認識

同性である女子グループに対する序列化は、「よくあった」「少しあった」を含めると、小学校時代で70%を超えており、中学校時代は90%程度でピークを迎え、高校時代には60%程度に低下していた。

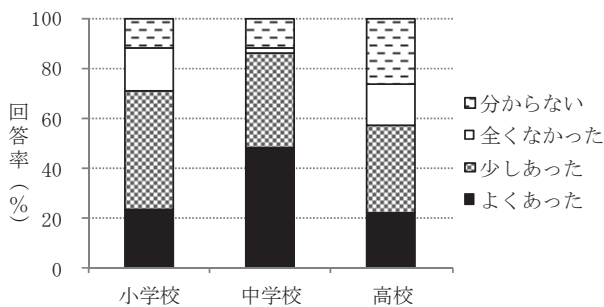


Figure 4 女子の男子グループに対する序列化の認識

異性である男子グループに対する序列化も、小学校時代から70%近くあり、中学校時代でピークを迎え、高校では低下していた。このことから、女子は男子にくらべて、発達の早い段階からグループ間の序列化を行う傾向があり、それがもっとも顕著なのが中学校時代であると言える。

また異性グループに対する序列化という点では、男

子は女子に対して高校時代に序列化を行う傾向が高いのに対し、女子は同性に対する序列化と同様に、異性に対する序列化は高校時代では低下していた。

以上の結果から、同性に対する序列化と異性に対する序列化は必ずしも同一ではなく、男子と女子でその序列化は共有されているわけではないことが示唆された。

2. グループ間の序列化の内容・理由

序列化の内容・理由については、記述された回答のすべてを分節単位に分け、それらをKJ法により分類した。記述された理由の総数は781であった。

カテゴリーの生成に際しては、これまでの研究 (e.g., 森口, 2007; 水野他, 2015; 西本, 2000; Rose, et al., 2011; 鈴木, 2012) において、学級内地位や人気との関連が検討されてきた要因を参考にしながら行った。とくに性格特性を表す記述については、森口 (2007) のいう「自己主張力」、「共感力 (他者と相互に共感する力)」、「同調力 (クラスのノリ (空気) に同調し、場合によっては空気を作っていく力)」、学級内地位と生徒の特徴やコミュニケーション・スキルとの関連を検討した西本 (2000) や水野他 (2015) の研究、さらに性格の5特性表現に関する研究 (村上, 2003) を参考にしながら、筆者と心理学を専攻する学部学生1名の2名で協議して分類した。

その結果、性格以外のカテゴリーについては、「容姿・外見」(格好の良さ、可愛さ、ルックス、顔、服装、身なりなど)、「学力」(勉強、成績、頭が良いなど)、「運動能力」(運動が得意など)、「部活動」(運動部か文化部かなど)、「異性魅力」(モテるか、彼・彼女がいるかなど) という5つのカテゴリーが生成された。

性格を表すカテゴリーについては、「外向・協調性」(明るさ、優しさ、話しやすさ、元気の良さなど)、「面白さ」(面白さ、ユーモアがある、ノリの良さなど)、「リーダーシップ」(リーダーシップがある、積極的、活発、目立ちやすさ、責任感がある、人望があるなど) の3つのカテゴリーが生成された。

以上の9つのカテゴリーで総記述数の92.6% (781の内723) がいずれかのカテゴリーに分類された。どのカテゴリーにも分類されなかった記述には、仲の良さでグループ分け、いじめ、休み時間の過ごし方、趣味、家柄などが挙げられたが、いずれも少数であったため、これらは「その他」に分類した。

次に、調査対象者が記述した理由を、これらのカテゴリーに分類した。複数の理由を記述していた場合は、各カテゴリーにそれぞれ分類した。

Table 1 は、序列化の認識に関する質問において「よくあった」「少しあった」と回答した調査対象者の中で、各カテゴリーの理由を記述した人数とその割合を示したものである。

Table 1 各学校段階における序列化の理由の内訳

	学校	容姿・外見	運動能力	学力	部活動	異性魅力	外向・協調	面白さ	リーダーシップ	その他	序列化の回答者数
男子→男子	小学校	7 (25.0)	12 (42.9)	3 (10.7)	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.6)	7 (25.0)	7 (25.0)	28
	中学校	9 (30.0)	6 (20.0)	9 (30.0)	8 (26.7)	1 (3.3)	8 (26.7)	8 (26.7)	14 (46.7)	5 (16.7)	30
	高校	8 (22.9)	5 (14.3)	8 (22.9)	5 (14.3)	7 (20.0)	9 (25.7)	10 (28.6)	6 (17.1)	2 (5.7)	35
男子→女子	小学校	21 (70.0)	0 (0.0)	1 (3.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	9 (30.0)	2 (6.7)	2 (6.7)	3 (10.0)	30
	中学校	33 (78.6)	4 (9.5)	1 (2.4)	3 (7.1)	0 (0.0)	10 (23.8)	1 (2.4)	2 (4.8)	4 (9.5)	42
	高校	36 (81.8)	1 (2.3)	1 (2.3)	0 (0.0)	2 (4.5)	15 (34.1)	4 (9.1)	3 (6.8)	1 (2.3)	44
女子→女子	小学校	21 (44.7)	6 (12.8)	4 (8.5)	3 (6.4)	2 (4.3)	14 (29.8)	2 (4.3)	6 (12.8)	11 (23.4)	47
	中学校	28 (49.1)	4 (7.0)	5 (8.8)	9 (15.8)	4 (7.0)	19 (33.3)	2 (3.5)	18 (31.6)	10 (17.5)	57
	高校	15 (37.5)	2 (5.0)	4 (10.0)	4 (10.0)	3 (7.5)	9 (22.5)	0 (0.0)	11 (27.5)	7 (17.5)	40
女子→男子	小学校	24 (52.2)	25 (54.3)	6 (13.0)	2 (4.3)	2 (4.3)	11 (23.9)	4 (8.7)	3 (6.5)	2 (4.3)	46
	中学校	29 (51.8)	13 (23.2)	4 (7.1)	10 (17.9)	5 (8.9)	13 (23.2)	5 (8.9)	8 (14.3)	2 (3.6)	56
	高校	16 (43.2)	5 (13.5)	8 (21.6)	5 (13.5)	5 (13.5)	16 (43.2)	4 (10.8)	2 (5.4)	4 (10.8)	37

注：カッコ内は序列化が「よくあった」「少しあった」と回答した人数で割った回答率

### 1) 男子の男子グループに対する序列化の理由

小学校では運動能力が43%と高く、ついでリーダーシップ25%、容姿・外見25%の順であった。中学校では運動能力を挙げる者は20%に低下し、代わってリーダーシップを挙げる者が47%まで増加した。それ以外の理由としては、容姿・外見30%、学力30%、部活動27%、外向・協調性27%、面白さ27%がそれぞれ3割程度が挙げており、序列化の理由が多様化していた。高校では、運動能力やリーダーシップを挙げる者は少なく、面白さ29%、外向・協調性26%、容姿・外見23%、学力23%、異性魅力20%であった。中学校時代はほとんど挙げられなかった異性魅力が20%近くいた点が中学校時代とは異なる結果といえる。

### 2) 男子の女子グループに対する序列化の理由

小学校から高校にかけて一貫して容姿・外見を挙げる者が7割から8割程度存在し、ついで多かった外向・協調性は2から3割程度であった。これまでの研究でも、容姿・外見が人気の高さに影響することが示されているが(e.g., 西本, 2000; Rose, et. al., 2011; 鈴木, 2012), 男子から女子グループに対する序列化という点では、容姿・外見を重視していることが示唆される。

### 3) 女子の女子グループに対する序列化の理由

小学校から高校にかけて、容姿・外見が4割から5割程度でもっとも高く、外向・協調性が2割から3割程度を占めていた。容姿・外見を挙げる割合は、男子から女子グループに対する序列化にくらべると低いですが、容姿・外見が重視されると認識している点は男子と同様の結果と言える。

ただし、女子では容姿・外見と外向・協調性以外にリーダーシップを挙げる者も多く、中学校では32%、高校では28%であった。同性グループの序列化においてリーダーシップが重視される点は男子から男子グループに対する序列化と同様であるが、男子では小学

校と中学校でリーダーシップが重視されていたのに対し、女子では中学校や高校で重視されるという違いがあった。

### 4) 女子の男子グループに対する序列化の理由

小学校では、男子から男子グループに対する序列化と同様に、女子でも運動能力を挙げる者が54%と高かった。また男子では低かった容姿・外見も52%と高く、ついで外向・協調性が24%であった。中学校でも容姿・外見を挙げる者は52%と高く、運動能力は小学校にくらべて23%に低下し、外向・協調性は23%であった。高校でも容姿・外見を挙げる割合が43%と高く、加えて外向・協調性も43%と高かった。また男子から男子グループに対する序列化と同様に、高校では学力を挙げる者も22%あった。

## 考 察

本研究では、大学生を対象にして、小学校から高校までの学級内の人間関係について、「クラス内の友人グループ間における非公式なステータスの序列」があったかどうかを、(1) 同性から同性グループに対する序列化の認識と、同性から異性グループに対する序列化の認識、(2) 序列化の認識があった場合は、どのような点で序列化を行っていたかという序列化の理由、という2つの観点から検討した。

### 1. 各学校段階における序列化の認識率

同性の同性グループに対する序列化の認識は、男女ともに中学校でもっとも高く、「少しあった」を含めた認識率は、男子で77%、女子では87%であった。この結果は、グループ間の序列として認識されるスクールカーストは、中学校や高校で顕著であるという鈴木(2012)や須藤(2014)の指摘と一致する。ただし、小学校時代でも「少しあった」と回答した割合を含めると男女ともに50%を超えており、女子では小学校で

70%を超えていた。このことは、小学校時代でも学級内のグループ間の序列化がある程度存在していることが示すとともに、女子は男子にくらべて早い段階から序列化が形成されやすいことを示している。

グループ間の差として認識されるスクールカーストが中学校でもっとも高かった理由については、児童期から青年期にかけての友人関係の発達の变化が挙げられる。これまでの研究によれば、児童期から青年期にかけて友人関係のあり方は大きく変容し、小学校高学年頃から同性のみで構成される仲間集団が形成され始めることが指摘されている (e.g., 三島, 2003, 2004; Rubin, Bukowski, & Parker, 1998)。また仲間集団の形成には男女差が認められ、女子は男子にくらべて小学校高学年という比較的早い段階から親密性が高く排他的で固定的な小規模な仲間集団を形成しやすいこと (三島, 2003, 2004)、女子の仲間集団は情緒的な繋がりが重視され、比較的少人数で固定化した仲間集団を形成しやすいのに対し、男子は遊びや活動を中心とした流動性の高い比較的大きな集団を形成することが明らかにされている (e.g. 石田, 2002; 石田・小島, 2009)。

つまり、小学校時代の友人関係は緩やかに繋がった関係から比較的少数の固定化した仲間集団が形成され始めるが、その傾向は男子よりも女子の方が早く、かつ女子の仲間集団は男子にくらべて排他的で固定化しやすいために、小学校という早い段階からグループ間の序列化が生じやすいのではないかと考えられる。

他方、中学校にくらべて高校時代で序列化の認識が低下していた理由については、高校入試による選抜の影響が考えられる。中学校時代と同様に高校でも、特定の仲間集団は形成されるものの、高校入試による選抜で、学級内の生徒の多様性は小中学校ほど顕著でないと考えられるからである。これは、高校によって生徒の特徴や学級の雰囲気が大きく異なることからある程度推測できるだろう。ただし、本研究の調査対象者は国立大学に所属する大学生で、少なくとも平均以上の学力を有する高校に在籍していたと考えられる。鈴木 (2012) は、大学生の面接調査の結果から、スクールカーストは中学校で顕著であるが高校でも認められることを報告している。したがって、本研究の結果が他の高校に一般化できるかは疑問の余地がある。この点については、多様な学力レベルの高校を対象としてさらに検討する必要があるだろう。

一方、同性から異性に対する序列化の認識については、女子では中学校時代から大きく低下していたのに対し、男子では中学校以上に高く、「少しあった」を含めた認識率は80%を超えていた。後述するが、男子は女子に対する序列化の理由として、小学校から高校まで一貫して容姿・外見を7割から8割の者が挙げており、次いで挙げられていた外向・協調性は2割から3割程度であった。この結果から、男子は女子にくら

べて異性を表面的な特徴で序列化を行う傾向が強く、異性に対する興味関心が高い高校段階で、その傾向が顕著に現れた可能性が示唆される。

また、女子の女子に対する序列化の認識は、「少しあった」を含めて6割程度であったのに対し、男子の女子に対する序列化の認識は「少しあった」を含めると8割を超えていた。本研究では、同一の学級集団を調べていないため、いずれの認識が正しいのかを明らかにすることはできないが、同性に対する序列化の認識と異性に対する序列化の認識にはズレがある可能性が示唆される。この点については、同一の学級集団を対象にして、その認識にズレがあるかどうかを検討する必要がある。

## 2. 各学校段階における序列化の理由

小学校から高校までの序列化の理由において、もっとも変化が大きかったのは、男子の男子グループに対する序列化であった。具体的には、小学校では運動能力を挙げる者が43%ともっとも多く、中学校ではリーダーシップが47%ともっとも多かった。一方、高校ではリーダーシップは低下し、序列化の理由は、面白さ29%や外向・協調性26%、容姿・外見23%、学力23%、異性魅力20%など多岐にわたっていた。

このことは、男子におけるグループ間の序列化は、小学校では運動能力といった目に見えやすい外面的な要因から、中学校ではリーダーシップという内面的な特性へと変化するものの、いずれも他者に対する力の強さを反映する要因によって規定されやすいことを示唆している。ただしその一方で、中学校では、異性魅力以外のすべての理由が20%以上で挙げられており、さらに高校では、運動能力やリーダーシップを序列化の理由として挙げる者は少なかった。このことから、男子グループに対する序列化の視点は、小中学校から高校にかけて大きく変化することが示唆される。

一方、男子の女子グループに対する序列化は、小学校から高校まで一貫して、容姿・外見が大半で外向・協調性は3割程度に過ぎなかった。同性グループに対する序列化と異性グループに対する序列化は、異なる視点から行っており、異性グループに対する序列化は、容姿・外見という身体的魅力や、明るさ、親しみやすさといった性格特徴によるところが大きいと言える。

女子の女子グループに対する序列化でも、容姿・外見と外向・協調性が重視されるという結果は、男子から女子に対する序列化と同様であったが、女子の場合は、それに加えて、中高ではリーダーシップが3割程度挙げられていた。女性の女性に対するランクづけという同性内の序列化は、男性の場合と同様に、他者に対する影響力という要因も重視されていることが示唆される。

女子の男子グループに対する序列化では、小学校で

は運動能力と容姿・外見を挙げる者が多くだったが、中学校では、容姿・外見が多く、高校では容姿・外見と外向・協調性を挙げる者が多かった。男子グループに対する序列化において運動能力が重視されるという点は、小学校における男子から男子グループに対する序列化と同様であるが、容姿・外見や外向・協調性が男子にくらべて重視されている点が異なっていた。このことは、異性グループに対する序列化には、容姿・外見という身体的魅力や、明るさ、親しみやすさといった性格特徴が重視されるという男子の場合と類似した結果といえるだろう。

### 3. スクールカースト研究の今後の課題

最後に、本研究のまとめと今後の課題について述べる。

本研究の結果から、グループ間の序列化という認識は、中学校でもっとも高く、男女ともに8割程度の者が少しはあったと回答していた。一方、小学校でも5割以上が少しはあったと回答しており、女子では7割程度が少しはあったと回答していた。これまでの研究では、グループ間の序列化が顕著になるのは中高時代であるという知見が多かったが、本研究の結果から、少なくとも女子では小学校時代からグループ間の序列化は形成されていることが示された。

また、同性グループに対する序列化の認識と、異性グループに対する序列化の認識にはズレがあることも明らかとなった。たとえば、小学校での男子グループの序列化について、少しはあったと回答した男子は5割程度であったのに対し、女子は7割近くが少しはあったと回答していた。他方、高校の女子グループ間の序列化では、少しはあったと回答した女子は6割程度であったのに対し、男子は8割程度が少しはあったと回答していた。

また序列化の理由に関する分析から、同性グループに対する序列化の理由と、異性グループに対する序列化の理由は異なっており、全体的な傾向として、異性グループに対する序列化の理由は、同性グループに対する理由にくらべて多様性に欠け、容姿・外見といった表面的な特徴を挙げることが多いことが示された。

このような同性グループに対する序列化と異性グループに対する序列化の理由が異なるという結果については、異性グループ間の序列化の実情を、部外者である異性はよく知らなかった可能性がある。また同一のクラスを対象とした調査ではないために、調査対象者のいたクラスの違いが反映されたことも考えられる。しかしながら、少なくとも男子と女子では、同性グループの序列化と異性グループの序列化を異なる視点から見えており、男女を含めたクラス全体においてグループ間の序列化が共有されているわけではないことを示唆している。

これまでのスクールカーストに関する研究では、グループ間の序列化が形成される要因として、自己主張の強さといったコミュニケーション能力やスキル、容姿・外見、学力といった個人の要因だけでなく、それが維持される根拠として、その地位の差が教師を含めたクラス全体で共有されていることを挙げていた(鈴木, 2012)。しかし本研究から、グループ間の序列化の認識やその理由は男女で異なっており、男子と女子では同じ男子グループや女子グループに対して、異なる基準で序列化を行っており、少なくとも、男子のグループの序列化と女子のグループの序列化は、男子で共有されているわけではない可能性を示唆している。もちろん先述したように、異性グループ間の序列化は、部外者である異性にはその実態がよく分からないという可能性はある。しかし、学級内には男女がほぼ同数存在しており、それぞれが異なる観点から序列化を行っているとするならば、少なくとも異性グループに対する序列化の認識も、同性グループの認識になんらかの影響を及ぼすと考えられる。

男子と女子はそれぞれで序列化を行っており、それらは男女で共有されていないのか、あるいはある程度共有されているのかを明らかにするには、以下の点についてさらに検討する必要があるだろう。

第一の課題は、グループ間の階層や序列化が学級内にどの程度実際に存在し、それらがどの程度学級内で共有されているかを客観的に示すことである。たとえば、「社会認知的マッピング」という学級内の仲間集団を面接法を用いて測定する手法を用いた研究によれば、それぞれの児童生徒は幾つかの仲間集団やグループが存在すると回答し、そのメンバーを回答することもできるが、グループの数やそれに含まれるメンバーは、調査対象者である児童生徒で異なることが明らかにされている(石田, 2002, 2007)。またソシオメトリックテストを用いて学級内の仲間集団を同定しようとする研究によれば、女子では比較的小集団で固定化した仲間集団を見いだせるが、男子では仲間集団は規模も大きく、遊ぶ内容などによって流動的に変化することも明らかにされている(石田, 2002)。つまり、個々の児童生徒の認識では、仲間集団やグループがある程度区別して認識されているが、実際のソシオメトリーなどの手法によって抽出された仲間集団やグループは緩やかにつながっており、仲間集団やグループの境界や範囲は、それぞれの児童生徒が認識する以上にあいまいである場合が多いのである。

これらの知見を踏まえると、スクールカーストといったグループ間の階層や序列化は、それぞれの児童生徒が自身の頭の中で個々に認識し、学級内の人間関係をより単純化して認識しようとするグループ化やラベリングなどによるもので、それが学級内のクラスメイトに共有されているとは限らない可能性がある。

したがって、それぞれの児童生徒が認識している仲間集団やグループが、実際に学級内に存在するグループとして存在するかどうか、またその仲間集団やグループが他のクラスメイトによって共有されているかどうかをまず明らかにする必要がある。そうでなければ、スクールカーストとは、実際の学級内に存在する友人グループ間の序列化や階層化ではなく、単に児童生徒の個々人の頭の中に存在する仲間集団やグループのカテゴリー化やその序列化、階層化の認識に過ぎないと考えられる。

以上の課題を検討するには、まず同一の学級集団を対象にして、社会認知的マッピングなどの手法を用いて、個々の児童生徒がどのような仲間集団やグループの存在を認識し、そのグループ間にどのような差があると認識しているかを測定する必要がある。その上で、個々の児童生徒が描いた仲間集団やグループがどの程度共通に認識されているか、またその序列化がどの程度共有されているかを検討する必要があるだろう。このような手続きを経て、はじめて個々の児童の頭の中の認識を超えた、実態としてのスクールカーストを検討できるのではないかと考えられる。

## 引用文献

- 石田靖彦 (2002). 面接法を用いた集団構造の把握—ソシオメトリック・データとの比較による信頼性・妥当性の検討— 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **51**, 93-100.
- 石田靖彦 (2007). 集団構造の把握手法としての社会認知的マッピング法 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **10**, 255-260.
- 石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連—仲間集団の形成・所属動機という観点から— 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **58**, 107-113.
- 三島浩路 (2003). 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究 生徒指導研究, **15**, 51-56.
- 三島浩路 (2004). 友人関係における親密性と排他性—排他性に関連する問題を中心にして— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **51**, 223-231.
- 水野君平・加藤弘道・川田 学 (2015). 中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係—教室における個人の地位と集団の地位という視点から— 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター子ども発達臨床研究, **7**, 13-22.
- 森 慶一 (2007). 学校カーストが『キモメン』生む—分断される教室の子どもたち 朝日新聞社『AERA』, 2007年11月19日号
- 森口 朗 (2007). いじめの構造 新潮社
- 村上宣寛・村上宣寛 (2003). 日本語によるビッグ・ファイブとその心理測定的条件 性格心理学研究, **11**, 70-85.
- 西本裕輝 (2000). 学級における子どもの資源と地位ヒエラルヒー—D.H.ハーグリーヴスの集団分析枠組の検討を中心に— 琉球大学教育学部紀要, **56**, 115-128.
- Rose, Glick, & Smith. (2011). Popularity and gender: The two cultures of boys and girls. In A. H. N. Cillessen, S. Schwartz, & L. Mayeux (Eds.), *Popularity in the Peer System* (pp. 103-122). New York: The Guilford Press.
- Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. (1998). Peer interactions, relationships, and groups. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of Child Psychology (5th ed.) : Vol.3 Social, Emotional, and Personality Development* (pp. 619-700). New York : John Wiley & Sons, Inc.
- 須藤春佳 (2014). 友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係 神戸女学院大学論集, **61**, 113-126.
- 鈴木 翔 (2012). 教室内カースト 光文社